

DRAMA かながわ

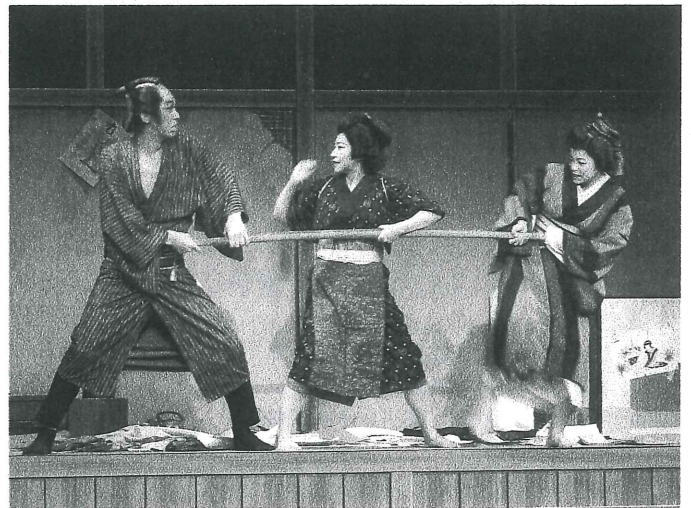
《神奈川県演劇連盟》 ★横浜市中区福富町西通り52 Tel.045-261-4866

神奈川県演劇連盟の

存在価値とこれから



「西遊記」2000年11月公演



「元禄・馬の物言い」2005年10月公演



「あの空の向こう」2003年3月



「セピア色のカラス」2006年2月公演

神奈川県演劇連盟会長 横田和弘

近年、神奈川の演劇環境は猛烈な変化の中にあるような気がしてならない。

- ・劇場などハード面の、建設ラッシュ（神奈川におけるここ10年の劇場施設の増加は30近くにもなっているそうだ）
- ・経済不況による 文化行政の見直し
- ・指定管理制度導入による 劇場との関係
- ・助成金などの見直し

市と演劇連盟の距離

最近、大きな出来事があった。横浜市が、横浜演劇を作る会（横浜演劇連盟）の助成金を打ち切ったことである。これは、たんに不況でお金を出さなくなったというより、ほかに大きな意味を持つような気がしてならない。つまり市と演劇連盟の距離をとり始めたのではないかと思うのである。アマチュア劇団を、単なるお稽古事として見始めようとしているのではないかという気がしてならない。

横浜だけでなく、横須賀演劇連盟にも似たような動き

が見られる。横須賀演劇連盟へ出ていた助成金が、演劇祭の名目が変わり、本年から市民文化祭の行事に組み込まれることになった。

どこの地域においても、似たようなことがおき始めている。

つまり、劇団が芝居を創ることは、当たり前であり、客席は仲間と関係者しか見ていないと思われるような人数でしかない。これでは、お稽古事の発表会とかわりはない……。行政側の考えが見えてくる。残念ながら、その評価に 反論を唱えにくい状況を認めざるを得ないのが実情なのだが……)

公演活動こそが、演劇の日常であり 社会的責任なのだというわれわれの論理は、もはや届かなくなっている気がする。行政は(社会)は、社会に開かれているという言葉が武器に、ほかのものを求めている。劇団が芝居を打つだけでは、助成に値しないということである。

県立青少年センター 県文化課との関係

反面、今、神奈川演劇連盟は、県立青少年センター、県文化課との関係は、よい方向で進んでいる。これは、県演連の幾つかの仕事が、評価されているからだと思う。

それは、機関紙の発行であり、資料室の存在であり、世界演劇祭開催であり、演劇博覧会であり、芝居塾であり……。なぜ、これらの仕事が評価されるのかは、自然と見えてくる。

しかし、順風かといえば、そうでもない。合同公演の担い手探し・芝居塾の担い手探し・資料室運営の人員不足・ドラマ神奈川の発行への手不足……。そして、大きいのが集客数の減退。……。問題は多い。

連盟の力を増す

今の状態をいつまで、維持して行けるのか……。

状況は、待っていたらよい方向へは進んでいかない。今こそ積極的に動くべきだと思う。今、多少なりとも力があるうちに、動くべきだと思うのである。

何をどう動くのかといえば、安直に聞こえるかもしれないが、連盟の力を増すこと。つまり、参加団体を増やし力をつけ、さらに認められる連盟になるということである。

創る側の意識を変える

そこで、提案したのが、アマチュアにとらわれず、プロといわれる人、劇団(かかし座、夢座、ポートシアターなど、それほど神奈川県下のプロ劇団はおおくはない)若い連盟を知らない劇団、今は連盟に興味のない劇団、さらには高校演劇など学校演劇や市民ミュージカルなど、そして観る側の組織(演劇鑑賞会、親子劇場など)、横浜みなと未来演劇祭など 広く声をかけ 参加を促そうということである。つまり 今まで掲げてきたアマチュア(地域劇団)・創る側の意識を、変えようということである。

双方に、利点があるならば不可能なことではないように思われる。

連盟にとっては、たとえば、演技を含めた、芝居創りのノウハウ・制作的なこと・人材確保・集客への足がかり……

何より、これから提案したり、要望をするときの大き

な力になるはずである。

一方、神奈川の地で、演劇を展開してゆくのなら、地域の演劇人との交流や、今われわれが持っている、センターや文化課との関係など、参加する側にとっても、利点はあるはずだと思う。

県を動かす

しかし、ただ参加を促したところで、見えないものへそう簡単に、協力は得られないだろう。具体的なものが必要だ。そこで、提案は、平成21年完成予定の、神奈川芸術劇場の、柿落としのための、合同公演である。

先に提案した、劇団、人材がそろえば、県を動かすことが出来るだろうし、集客をも含めて、かなり成果のあるものが出来上がると思う。

成功すれば、先の大目標に大きな階段を一歩上ることが出来る。

今、そしてこれからは、演劇で何が出来るのかを問われていく時代になると思う。

地域での演劇、日常の講演活動の大切さを、堂々と言える、「力」をつけなくては……。それが、今回の提案。

連盟が、社会的な責任を果たしてゆく力を持てたときに、色々なものが変わってくるはず。

活発な意見と、行動を期待したい。

神奈川県演劇連盟のホームページより抜粋

◆神奈川から世界に発信する〈ドラマ神奈川〉の発行

神奈川県演劇連盟の機関誌「ドラマ神奈川」は、参加劇団の交流の場所であり、演劇を見つめる広場です。

参加劇団には様々な個性があります。その個性の違う集団が一堂に会して時には合同公演をし、学び合う様々なイベントをしますが、紙面はそういう取り組みを応援するだけでなく、集団や個人が持っている悩みや課題を取り上げる討論のステージにも事なります。

具体的には演劇連盟の課題、劇団員の悩み、地域演劇の役割、相互観劇の劇評、各劇団の公演情報などが掲載されています。

この機関誌は参加劇団の劇団員だけでなく、全国の地域演劇集団、行政機関、世界の地域劇団に送られていて、神奈川から地域演劇の息吹を発信する役割を果たしています。

◆神奈川県演劇連盟の目的

連盟を結成することで交流が深まり、それぞれの地元で活動する環境が少しでも良くなれば良いなあというのが役割の一番大きなところです。

連盟には、神奈川県内で活動する劇団、演劇に携わる個人なら誰でも加入できます。神奈川県各地で演劇の公演が日常となるように、たくさんの劇団が参加してくださることを期待しています。

2008年度神奈川演劇博覧会 公演スケジュール決定!

神奈川演劇博覧会実行委員長 関口素夫

2008年3月20日(木・祝)～23日(日)に開催される第5回神奈川演劇博覧会(以下、演博)の公演スケジュールが決定しました。

今回の出演劇団

- KTMRキッチンシアター(横須賀)
- 劇団かに座(横浜)
- G/9-Project(横浜)
- 劇団「無題」(藤沢)
- 劇団ムゲン88(藤沢)
- ライト・トラップ(川崎)
- 郷マイムプランニング(鎌倉)
- 風雲かぼちゃの馬車(川崎)
- 演劇プロデュース 螺旋階段(小田原)
- The 新茶(横浜)
- 劇団雑貨屋まんぼう(秦野)
- 劇団くろひげ(横浜)
- 演劇集団カナブンズ(川崎)
- 劇団T-cob(横浜)

以上14劇団です(申込受付順、公演スケジュールは表参照)。14劇団の参加は過去最多となります。スゴいことになりそうです。実は出演劇団募集の段階では「9 劇団を募集」と謳っていましたが、フタを開けてみればなんと21 劇団からのエントリー。こんなにも多くの団体に興味を持って頂いたことは、大変ありがたいことです。さすがに21 劇団の出演という訳にはいかないの、やむを得ず抽選で出演劇団を14 劇団に絞ることとなってしまいました(抽選を行ったのは今回が初めて)。抽選により出演できなくなった劇団の皆様には、ご期待に沿えることが出来ず、この場を借りてお詫び申し上げます。

演博の主旨

さて、今回の演博には私自身大いに期待をしております。これまでの演博には主旨として

- ・ 演劇の敷居を低くする
- ・ 各劇団の集客力アップ
- ・ 劇団間の文化的交流

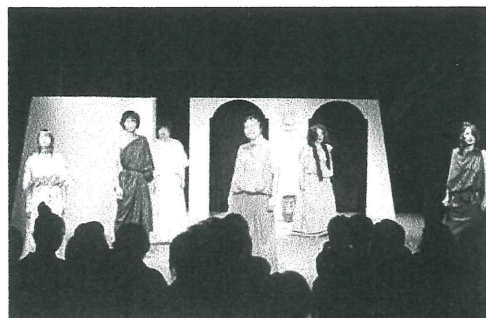
などがありましたが、参加劇団が多い今回の演博は、これらの点においてこれまで以上に実りの多いものになると考えられるのです。また今回は、地域で活動する劇団を横浜で紹介する、という役割を担うことにもなりそうです。実際、横須賀・秦野・小田原などを中心に活動してきた劇団が出演します。逆にそれらの劇団を観に来たそれぞれの地域の方々に横浜・川崎の劇団を観てもらおうということも期待できます。演劇はどこにでも身近なところで存在している、できるということを再認識できるチャンスでもあるのです。加えて、昨年(2007年)に旗揚げしたばかりの劇団が数劇団出演するというのも今回の演博の特徴でもあります。演博という企画が、こういった方々にとって気軽に参加できるものであり続けたいものです。

演博の目標

つまりこのような演博実行委員会の活動は、長い目で見れば演劇人口(観る側、演る側)を増やすことにもつながると考えています。目標は、クオリティを維持しながら演劇の底辺を広げること。つまり演博は、演劇界の(小澤征爾ではなく)山本直純を目指します、と言ったらおこがましいですかね。大きいことは、きっといいことなのです。各劇団で詳細を決定し、年始にはチラシが刷り上げる予定です。これから大いに宣伝してゆきます。今年は何のようなパフォーマンスが繰り上げられるのか?どうぞご期待ください。

	3月20日(木)	3月22日(土)	3月23日(日)
11:30	ムゲン88	ライト・トラップ	まんぼう
12:30	新茶	カナブンズ	郷マイム
13:30	G/9	かぼちゃの馬車	「無題」
14:30	かに座	KTMR	T-cob
15:30	螺旋階段	くろひげ	まんぼう
16:30	ムゲン88	ライト・トラップ	郷マイム
17:30	新茶	カナブンズ	「無題」
18:30	G/9	かぼちゃの馬車	T-cob
19:30	かに座	KTMR	バラシ
20:30	螺旋階段	くろひげ	

演劇博覧会当日のスケジュールは左記の通りとします。
参加劇団仕込み日等は後日決定いたします。



2007年度博覧会より



神奈川県演劇連盟合同公演のお詫び

神奈川県演劇連盟加盟劇団の皆様の御協力で、第五回神奈川県演劇連盟合同公演「からくり栗エ門」が無事打ち上げられましたことを御礼申し上げます。

しかしその折、パンフレットの「からくりのからくり」の文章中、県演連の理事長であり、河童座代表の横田和弘氏の名譽を著しく損ねてしまった事を深くお詫び申し上げます。

横田氏は合同公演ということもあり、劇団蒼生樹の脚本を書いて欲しいとのお願いを、心良くお引き受けくださり、約束期日前に「からくり儀右衛門」の脚本をきちんと仕上げてくださいま

した。にも関わらず、私共の座組(若い座員がいない)と力量不足で、上演する事が出来なかったという経緯をつまびらかに書けなかったために、横田氏が書けなかった、あるいは書けなかったという印象を与えてしまったことは、横田氏の名譽を著しく損なただけでなく、劇団河童座の座員、関係者はもとより、県演連加盟劇団の皆様、並びに観劇に来られたお客様に多大な誤解を与えてしまったことは誠に申し訳ないことであり、心より深謝いたします。

今後、稿を別にして、紙上ではありますが、経緯を明らかにいたしたいと思っております。

劇団蒼生樹 座長 濱田 重行

G/9Project

マジシャン(MAGICAIN)

作・演出/仲尾玲二

於:STスポット

2007年10月13日・14日

観終わった後にほのぼのとした気分になされてくれる「ハートウォーミングコメディ」というキャッチコピーそのままに、ほっとする芝居だった。これまでのG/9は、若い観客層が多かったが、今回は中年以上の姿が目立つ気がした。そしてそんな広い年代の観客席からは結構笑い声も聞こえてきた。総じて観客の反応はよかった。

我々がゆるくりあでもかつて拠点としたSTスポットは、横浜の小劇場演劇に重要な発表の場を提供してきた。G/9もそんなグループのひとつだったが、最近は他所に活動の場を展開して、STは久しぶりだとのこと。この小空間の魅力は、劇場空間を飛び出さんばかりのはち切れるような舞台の熱気を目の前というより鼻先で感じられるところにある。演技などは多少未熟でも、その熱情が十分であればOKみたいな雰囲気があった。

実は今回のG/9は、その点でちよつと観客席への攻め込みが弱かったかもしれない。小空間を突き破って発散する、というよりも、役者の演技はむしろ空間のサイズに合わせて作っているのかと感じた。

乱暴な言い方をすれば、丁寧さよりも破天荒さとスピードを求めた方が私は引き込まれただろう。特に大事なオープニングでの二人の登場人物の遣り取りが、期待したスピード感から離れ、お互いに何だか相手に気遣いをしながら台詞を紡ぎあっているような感じだった。この感覚は、その後も時々顔を出してきて、結局最後までぐんと引き込まれる感触を持てなかった。G/9には、シナリオを完成させず、まず状況だけ決めて役者同士の台詞交換を稽古場で積み上げ、その中からシナリオに盛りべき言葉を後から作りこんでいく作劇法があるが、もしかしたらその影響だったのか。公演後の呑み会でこの点を確認しておけばよかった。

評者:劇団横浜にゆるくりあ 吉浜直樹



劇団ひこばえ

Cicada

- 生命と青春文学の種子-

作・演出/熊手竜久馬

於:青少年センター多目的プラザ

2007年10月14日

Cicada(英語でセミのこと)は暗い地中で幼虫期17年成長するというが、セミの成長と17才の高校生のいまを重ね合わせて考えるという作者の視点がユニークでおもしろい。

高校生の原寸大の日常がスケッチ風に舞台上に提示されて「こんな風に高校生たちは考えているんだ」という発見がいくつもあ

る。日常生活の風景のなかで高校生たちが友人との関係に神経質なくらい繊細な関心をしめしていることが描かれている。

短いスケッチを暗転でつなぐ方法だが頻繁な暗転はストーリーが見え難くしている。

台本(戯曲)の書き方については作者それぞれの個性を反映して多様なアプローチがあるがその舞台にはリアリティが求められる。観客に「ありえない。。。」と感じさせてはいけない。「オキテ」頭にいれて戯曲を書けばリアリティのある作品に仕上げるはずである。

その「オキテ」(戯曲の基本的形式)とは次の通りである。

- 1)バックグラウンド(状況/シチュエーション)
- 2)アクションが展開し、混乱が起き始める
- 3)クライマックス
- 4)アクションが収束に向かう、終局につながる決断がなされる
- 5)終局と結論

この「オキテ」5ヶ条はけつこう使えるツールになるはずだ。

古手の劇団が多い県演連に若い劇団ひこばえが加入したことでフレッシュな風を送り込んでくれた。劇団ひこばえがその名前のおと若木に成長することを期待する。

県演連のメンバーは芝居づくりで永年苦勞をしてきているのでひこばえのみなさんは先輩のノウハウを食欲に吸収してほしい。どの劇団も協力を惜しまないはずである。

拙文は劇評というよりひこばえに対するエールのつもりである。

評者:横浜小劇場 荒井賢一

「オキテ」(戯曲の基本的形式)は「子どものための劇作レッスン」ジェラルド・チャップマン=著/松田弘子訳(日本劇作家協会発行)より引用。

劇団川崎演劇塾

八月のジャハラサード

作/高橋いさを 演出/渡辺綱男

於:青少年センター多目的プラザ

2007年10月19日~21日

人が死んだ時、その魂がさまよって、心残りが無くなるように活動をし、納得してから死者の国へ入る...そのようなお話がこのところ流行っているようだ。最近借りたDVDで観た中では、「この胸一杯の愛を」、「椿山課長の七日間」、「四日間の奇跡」等が良かった。この芝居もその仲間だ。

死んだら「無」であるという説、天国や地獄と呼ばれる「あの世」に往く説。肉体がこの世を去ってから48日間、魂はあの世に往く為の準備をするという話も聞く。お話として面白いのは、やはり魂があちこち往ったり来たりするするものだろう。

ダブルキャストが組まれていたが、私は10月21日(日)14:00の回を観せてもらった。

メンバーが増えて力強くなった「演劇塾」の面々が、楽しげに舞台を歩き来している。若い人たちも舞台上に立つ回数が増すごとに力をつけてきているようで、微笑ましく拝見した。浮き袋をつけた水着姿で、幕開きから最後まで徹すのが凄いと思ったが、明るいキャラで魅せてくれた渡辺さんをはじめ、藤田さん、小川さんたちベテラン勢が舞台を引き締めていたように思う。

音が欲しいところで音が無かったりしたり(ブリッジがその役割を果たしていなかった)、転換の手際が今ひとつ「・・・?」だったりではあったが...。役者の違う他の回も時間があれば観たかった。

今、どこの劇団でもメンバーの減少に四苦八苦しているのにメンバーの増員は羨ましい限りだ。若手がますます力をつけて活躍する、川崎演劇塾の今後の活動に期待している。

評者:劇団蒼生樹 川西玉枝



劇団こゆるぎ座

小田原藩望郷 又左衛門切腹

作/後藤翔如 演出/楠田正宏

於:小田原市民会館大ホール

2007年10月20日、21日

こゆるぎ座の芝居を観るのは初めてだったが、まず会場に着いたとたん驚かされた。700人以上は収容可能であろうホールがほぼ満席状態なのである。観客動員に苦労している劇団が増えつつある今日の状況からすると実に羨ましい限りの状態である。さぞや制作担当者ご苦労なされたのであろうが、どこからみても申し分のない客入りである。

時代物の作品ではいつも思うのだが、この作品でも実に多くの裏方の苦労がうかがわれる。大掛かりな舞台装置は高低差も考慮された重厚な造りであったし、衣装に至っては多種多彩な着物が登場していた。最後には鎧兜や旗指物・幟まで出てきたのである。

物語のストーリーであるが、家老職まで勤め上げたうえで隠居している主人公が藩にふりかかる様々な騒動に自らの意志とは関係無く巻き込まれていき、その一つ一つを解決していきつつも、最後には藩の悲願成就の為に自分の命まで投げうって人生の最後に死に花を咲かせるというストーリーである。全体的な話の流れとしては中々面白いと思う。しかし、メインのストーリーが完結する前にサブストーリーが展開していくのであるが、この話が膨らみすぎてしまい、後半のメインストーリーの展開が少し早すぎってしまったように感じる。確かに前半部分で登場人物たちの説明をしているのであるが、そちらの話が長くなった分、後半で話が端折られたような感想を持ったのは私だけだろうか？

少しばかり気になる点はあったが全体的に十分楽しめる作品に仕上がっていたように思える

評者:劇団葡萄座 宮城 忠

劇団蒼い群

創立 35 周年記念有終乃弾
煙が目にしみる

作/堤泰之 演出/福本幸男

於:横須賀市立青少年会館

2007年11月10日、11日

深刻な人間模様を面白おかしくコミカルに描いている作品で、この手の話は好きである。

特に、半分あちらの世界と、現実の人たちのやり取りは、おかしさと温かさが混ざり合い不思議な気持ちになる。

残されたものの諸事情や複雑な人間関係がよく描かれていて、旅立つ人への想いがしっかり感じられた。

二つの世界をつなぐおばあちゃんは、多分若い人が演じていたのだろうが、それが現実離れた雰囲気をつくって面白かった。

しかし、全体的にテンポがゆっくりと淡々としていたので、笑えるポイントを生かされてないのが残念な気がした。

亡くなられた？二人のところは、しみじみと想うところ、ポンポン会話が飛び交うようなところ、メリハリをはっきりさせると大爆笑なのに・・・おいしいと思った。お客さんも笑いたいのリズムに乗れない感じを受けた。

それともうひとつ、私にはどうしてもダンディーなおひげに見えなかったのが気になった。衣装が白装束だから仕方ないのかもしれないが、街にいるサンタさんみたく違和感を感じた。

評者:劇団河童座 高島 明子



ひこばえ「Cicada」 ↓



劇団麦の会

祝!還暦記念公演

第④回☆麦畑☆秋の大収穫祭
～登って昇って紅葉坂～

作/三嶋洋一、三嶋みどり、岡本みゆき、

山口雄大 演出/山口雄大

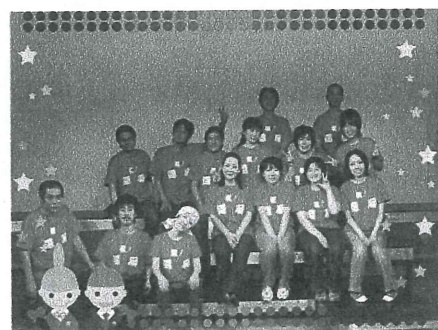
於:青少年センター多目的プラザ

2007年11月3日、4日

劇場に入ると、スクリーンにスライドで文字が映し出されていた。観劇前の諸注意の前説なのだが、文字だけのスライドながらも退屈させないよう冗談を交えていて、芝居だけでなく「公演丸ごと楽しんでいただきます」という意気込みが伝わってきた。

今回は全6作のオムニバス形式。1作目:夫を亡くした妻が喪主として挨拶の最中、突如現れた「本音と建前」が入り乱れるコメディもの。2作目:入院病棟にお見舞い客が来る芝居?と思わせておいて、実はそこは病室ではなく...というシリアスもの。3作目:追い詰められた中年男がピストルを手に、コンビニ強盗決行直前に現れた「良心と悪意」の葛藤するシリアス。4作目:仕事帰りのOLがコンビニでお菓子を選ぼうとすると、突如登場する「良心と悪意」のコメディ。5作目:電車の席に座るOLにかかってきた携帯電話に出ようとすると、またも登場「良心と悪意」のコメディ。そして6作目:独り暮らしの冴えない若者のもとに現れた若い女幽霊。幽霊なので人を10人脅かす、というノルマをこなすべく奮闘するコメディで、所々ピリッとくる時事的なネタを入れつつドタバタ劇を展開し...最後には、命と平和への真摯な思いが響く結末を迎えてゆく。「あたし、死んだのは20歳だけど...生きてたら80歳なんだよ」スクリーンに、色鮮やかな横浜みなとみらいの夜景の映像が次々と映し出される。それが徐々にフルカラーからセピア色、白黒へと色が抜けてゆき...横浜大空襲のものであろう、戦時中の白黒写真へと変わる。そして映像は再びフルカラーの現代に。「ヨコハマも変わったなあ...ビルが立ち並んで、星もよく見えない空だけど...焼夷弾が降ってくる空よりはずっといいね」この台詞に、時代も変わり世代もスタイルも変わりゆく中、劇団麦の会60年のアイデンティティーは変わらず今も続いている、そう感じられた。ただ面白おかしいだけじゃない、「思い」が心に残る芝居だった。

評者: Kentax 劇団横浜にゆうくりあ



劇団きさく座 しんしゃく源氏物語 -心の想いは未来を開く-

作／榊原政常 演出／高橋行恵
於：青少年センター多目的プラザ
2007年10月27日、28日

この物語は言わずと知れた、源氏物語の末摘花の巻である。亡き宮様の忘れ形見の姫と言う噂を伝え聞いて、薄幸の美女をイメージした光源氏がとある夜、屋敷に忍び込む。朝になり鼻の大きな姫の容貌にビックリ！そうそうに逃げ帰りそのまま……源氏を忘れかねる姫は、幾年も幾年も貧しさに餓死する程まで落ちぶれていながらも、源氏を信じて待つ。やがてその心が天に通じ、左遷を許され都に戻った源氏が姫の心にほだされ再び訪れて、メダシ メダシ！

この作品は高校演劇コンクールでよく女子高が取り上げる、各言私も高校生の時お嬢様女子高にタププリお金をかけてこの戯曲を演られ、負けたと言う忘れられない思い出を持つてる。きさく座さんは、何度もこの作品を手掛けていらっしゃるの、皆さんさすがです。

右近、左近を男性にしたのも面白いし、影絵も衣装も上手く創っていらっしゃる。ただし、折角生演奏を入れたのなら、S,E に使うだけでは勿体ない。発声も老婆心ながら、最後まで持つかな？ 思ったり、きさく座さんだけではないのですが、どうして末摘花の鼻を、花と鼻にひっかけ強調してブスにしないのかな？と、どこの劇団の末摘花もきれいすぎる！と云うのが不満です。

県連に加盟されてからのきさく座さんしか存知上げませんが、年々意欲的に行動されている姿勢は、横綱チュチュさんと並んで、古い体質の県連各劇団にとっても良い刺激を頂いていると感じております。次回も期待しております！

評者：劇団蒼生樹 勝碯若子



劇団かに座 海と日傘

作／松田正隆 演出／田辺晴通
於：関内ホール・小ホール
2007年11月16日～18日

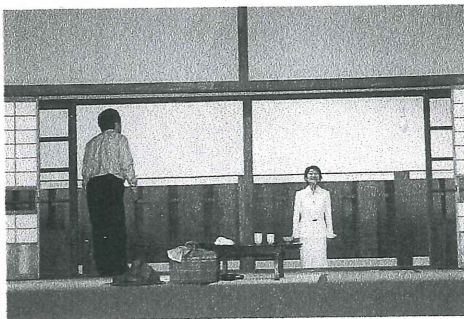
劇団かに座の公演を観劇させていただいたのは初めてでした。そして中学生、高校生、卒業生の若い世代の演劇に長くかかわってきた私としては、このような演劇は初めてのものでした。演技の深さをあらためて感じさせられ、たくさんのことを教えられた気がいたします。

「大人のドラマ」、「心暖まる夫婦の物語」とあり、また劇団かに座の公演は「絆・ふれあい」を主題にやられていられるとのことをプログラムで拝見いたしました。ゆるやかなテンポで穏やかに出されるセリフ、演技の展開に、中高生の劇団であるひこばえのメンバーにぜひとも観劇させるべきだったなと悔やみました。そして装置の立派さにすごいと思いつつ、それ以上に舞台を高くして前と奥を使う見事な構成に目をひかれました。また上手、下手のそでの「声演」にも関心をもたされました。

このような深みと広がりをもった舞台構成のなかで、「夫婦の絆」が演じられたのです。

雨上がりの虹のなかに3ヶ月の命の妻が佇み、その妻をいたわりながらも少々の不倫をもつ夫に「私のことを忘れてはいけないわよ」と微笑む…、それは激しい動きの中高生のどの演技よりもドラマスティックなものでした。

評者：劇団ひこばえ 村上芳信



劇団横綱チュチュ「WHITE DOLL」



劇団横綱チュチュ WHITE DOLL ～夕日は朝日のように美しい～

作／菱倉あゆみ 演出／団のぼる
於：杉田劇場
2007年11月22日～23日

産婦人科・婦人科病院を舞台にし、消えて行く命の尊さと生まれてくる命の大切さを、消えて行く命の患者が抱える人と人との繋がりや、生まれ来る子どもたちの生まれながらにして持っている運命、また、希望しない突然の妊娠のとまどいなど、難しい複数の問題をテーマにしながらも、あわたたくし明るい看護師・医者などのやりとりを交え重苦しさを感じさせない展開で、最後はそれぞれの問題を考えさせられる話になっており、上手にまとめ上げたなあという感想を持ちました。

私は初めて横綱チュチュを観させていただいたのですが、客席のお客さんからも、たとえば孫が出演しているから観にきているだろうというおじいちゃん・おばあちゃん、子どものお友達が出ているから観にいらるなど、家族・地域のつながりが強いと感じました。芝居を地域・家族のコミュニティの場に行っている…地域・家族のコミュニティの場に芝居を活用している活気のある劇団であるということも感じました。

しかし、そのような劇団のコンセプトから考えると、今回の芝居の題名からは想像がつかない話でもあり、最後になってやっと話が理解できたかなとも感じました。特に子どもたちにあの芝居が理解できたのだろうか、もっと誰でもわかるアプローチで話が展開する内容の方が劇団には合っているのではないだろうか。

また、必要であるか不明なシーンも多かったように感じます。生まれてくる命の大切さを表現するのに子どもたちが荷物をしょって出てくる多くの場面はあったほうが良かったのか、居酒屋の親父と、流しのギター弾きの場面は本当に必要であったのだろうか。

「チュチュ」だけのことでなく、オリジナルの脚本を書き、それを上演するのは、本当に難しいことだと思います。自分の書いたものは全部必要だと思ってしまおうと思います。最初から作り上げていくため、途中で、要らないものを付け加えたり、また出演者の関係もあります。しかし、冷静に芝居の質を高めることを最重視し、そぎ落とす作業の必要性を今後は考えていくことが大切なのかなと思ったりします。

評者：劇団友の会 新谷美智子

京浜協同劇団 木下順二追悼公演 巨匠(きょしょう)

作/木下順二 演出/細田寿郎
於:スペース京浜
2007年11月23日~25日、30日、12月1日

暗いまるで四角い箱のような会場に入ると天井や壁、床から舞台と客席が一体になっている空気に包まれました。それは、芝居が進むにつれて観ている私たちがあたかも舞台上の教室にいる民衆の一人になってしまう錯覚に陥るのに十分効果的でありました。

作者を兼ねる人物Aができて、この芝居の成り立ちを話すところから舞台は始まります。Aはまた、登場人物の演出家にもなり、間もなく幕が開く大劇場の楽屋で俳優マクベスの演技について議論します。俳優は、20年前の体験を思い出しているのです。それは第二次世界大戦が終わる直前のこと、若き日の俳優は収容所行き列車から脱走し空き家になった小学校の教室に転がりこみます。そこには、老人を含めた5人とほかにも避難民が住んでいました。この5人の人物たちの一人一人が自分の抱えている背景を忠実に演じられていて表現や動きから瞬きさえできないほどの緊迫した状況が伝わってきました。

老人は、旅回りの俳優で転がりこんできた若者に演劇の話熱く語ります。そこへ、秘密警察がやって来て5人の中から「知識人」を4人銃殺すると宣言します。老人は免れるのですが、自分は俳優だと言い張ります。老人は命をかけてマクベスを演じることで俳優である自分を訴えます。演技者なら演技する醍醐味を味わい、それを観ている観客は芝居の醍醐味を味わうことができる場面でした。観客である私たちも劇中の民衆の一人となってマクベスに惹き込まれていきました。

「知識人」と見なされた老人は、若者に微笑みかけて消えていきます。俳優としての自分の存在を証明し、誇りを全うできたことの満足の笑みでもあったのでしょうか。感動的なシーンでした。

この話を聞かされた演出家は俳優に「好きなように演じてくれ」といいます。このドラマの筋の巧みさをAが上手く伝えてくれていました。そして、マクベスを演じることになる俳優の苦悩の後のマクベスが観たくなりました。1時間10分という時間がとても濃いものでしばらく余韻に浸っていました。

評者:かに座 金谷陽子



劇団河童座 わしゃ喰っちゃらん

作・演出/横田和弘
於:横須賀市立青少年会館、相鉄本多劇場
2007年12月1日、2日 14日~16日

学校や施設での公演を続けてきた作品、とチラシに記載されていたようにアルツハイマーの症状が経過していく過程をイラストのスライドや、クイズ形式をとり入れるなどして、わかりやすく描いていた。

アルツハイマーの老人役のお二人は、実年齢も役に近い方が演じられていたのが、存在感があり、声も聞きやすく役としての説得力充分で見事に認知症状を好演されていたので、河童座団員の年齢層の厚みがうらやましく思う。

ただ、一般公開として公演するには、やや物足りなさを感じてしまった。それは、明るい家族のお話、と紹介されていた明るさは出ていたと思うが、

家族間のつながりとそれぞれの関係が(お父さんと娘たち、お母さんと娘たち、夫婦、姉妹)観ている側に伝わりにくかったから...かもしれない...

後半部分で幼児に戻っていく養父を、理解して受け入れていこうとする嫁の心情の変化の演技に、じんわりさせられただけに前半部分の説明的なセリフが多いのが、もったいないな~と思う。

繰り返し公演し続けてきた大切な作品、として演じている思いは見ている側に十分に伝わってきました。そして、最後の舞台挨拶に「土曜の夜の貴重なお時間を頂戴し、ありがとうございます。」この感謝の気持ちが、ストレートに心に響きました。

評者:劇団横綱チュチュ 宗田・ヒサヲ



劇団河童座「11匹きのネコ」 ↓



劇団葡萄座 11匹きのネコ

作/井上ひさし 演出/山本伸二
於:テアトルフォンテ
2007年12月8日、9日(12月9日14時観劇)

井上作品の「十一匹のネコ」にはたくさんの期待と夢を持って観客が集まってきます。当然、上演する側も作品の大きな荷物を背負うことになる。私もその一人ですが今回はちょっと辛口の感想になる事をお許しいただきたい。二通りの台本のうち今回の作品は終盤はユートピアにネコ達がネコの王国を確立する。しかし初代の大統領を努めた自由で前向きなニャン太郎はやがて仲間撲殺されてしまう井上作品独特のどんでん返しがある。俳優はニャン十一のベテランを除けばほとんどが新人と思われる。腹をすかした野良ネコたちの所に風のようにやってきた威勢が良くておっちょこちょいのニャン太郎。ネコ達はニャン作老人から聞いた大きな魚の話に夢を託して旅にでることになる。旅をしながらネコたちはかけがいの無い仲間になっていく。そして「もう終わるんだ一人ぼっちのさびしい夜はともだちができたから...」と歌い上げるのだが。残念ながら舞台からはお話のおかしな部分や台詞ばかりが上滑りしていて、観客の私たちは心を躍らせることが出来ない。大切な心の悩みや仲間への思いやりが見えてこないからだ。新人を中心にした舞台だから出来ないことはいっぱいあるだろうが、俳優は自分の役で他人を揺り動かすための努力をしないと魅力がなくなる。やがて「僕たちには素晴らしい仲間がある。十一匹は野良ネコでもう一匹は大きな夢のさ」苦勞したから歌い上げることができるのです。舞台のネコ達が生き生きとしていなければ最後の王国を作り出す原動力にはなりません。井上作品は小さな言葉や何気ない書きでも深い意味を綴っています。たとえばやっと見つけた大根をニャン太郎がニャン十一に分けてやる場面。自分も腹をすかしているのに大切な大根を半分あげます。さあ、大根は上の方がうまいか尻尾の方がうまいのか。どっちの側の大根を上げますか...十一は泣きながら「すまねえ！」って。こんなことを考えながら役者は楽しんでくれたらと思いました。演出上ではニャン作老人を現代版?にしたことが気になる設定変更でした。「北の空をご覧、大きな星が一つキラキラかがやいているだろう」「若いっていいなあー」の台詞が絵空事に聞こえ、あの舞台の老人では十一匹を夢の旅に送り出すことが出来ないのではないのでしょうか。もちろん現代の老人問題を入れ込んだ気持ちも分かります。新人のニャン太郎は声もいいし可能性をいっぱいちりばめていますから。是非次回を期待したいと思います。

評者:団のぼる

演劇資料室より

—演劇資料室の「蔵書目録」を Web 公開—

懸案であった資料室の図書をインターネット上で公開ができることになった。

蔵書目録を公開するために図書台帳と現物の確認作業に手間取っていたがやっと蔵書データベースが完成して近日中に青少年センター（または神奈川県）のホームページに掲載されることになった。公開されるのは6800冊。資料室の荷重制限のため搬出をよぎなくされ別置されている図書と資料室に開架公開されている図書の区分に時間がかかりやっと公開の目処がたった。

蔵書データベースの公開により資料室の蔵書を Web 上で検索が可能になり利用者が大幅に増加することを期待している。

未整理資料の落ち着きが決まった。

横浜演劇研究所の資料のうち演劇資料室に収蔵できないものが

県費購入と寄贈された本は、海外作品、学校演劇他総数150冊。是非ご利用下さい。

演劇資料室に2007年受け入れ図書（日本の戯曲）リスト（児童向け雑誌は除く）

書名	著者名・出版社
秋元松代全集 1～5	秋元松代・筑摩書房
捨子物語 岸田理生戯曲集 1	岸田理生・而立書房
糸地獄 岸田理生戯曲集 2	岸田理生・而立書房
クリスマスに還る 阪本龍夫戯曲集	阪本龍夫・門土書房
オッペケペ・袴垂れはどこだ 福田善之第二作品集	福田善之・三一書房
小山内薫全集 3：（戯曲篇）	小山内薫・春陽堂
三日間	三好十郎・櫻井書店
俊寛	斎藤憐・而立書房
海光	斎藤憐・而立書房
ゴダイゴ	斎藤憐・而立書房
サロメの純情 — 浅草オペラ事始め —	斎藤憐・而立書房
エンジェル — プレヒト「セチュアンの善人」より —	斎藤憐・而立書房
鳩を飼う姉妹	岩松了・而立書房
市が尾の坂 — 伝説の虹の三兄弟 —	岩松了・而立書房
恋愛御法度 — 無駄と正直の劇的発作をめぐって —	岩松了・而立書房
お茶と説教 — 無関心の道徳的価値をめぐって —	岩松了・而立書房
台所の灯 — 人とその一般性の微候に寄せて —	岩松了・而立書房
説教強盗・玉の井余譚 金杉忠男第一作品集	金杉忠男・而立書房
竹取物語 金杉忠男第二作品集	金杉忠男・而立書房
花の寺・更科原っぱ物語 金杉忠男第三作品集	金杉忠男・而立書房
ひまわり 竹内銃一郎戯曲集	竹内銃一郎・而立書房
戸惑いの午後の惨事・今は昔・栄養映画館・恋愛日記 竹内銃一郎戯曲集 3	竹内銃一郎・而立書房
二万七千年の旅	野田秀樹・而立書房
鳥獣戯画版 好色五人女	知念正文・而立書房
向日葵の柩	柳美里・而立書房
白瀬中尉の南極探検 別役実戯曲集	別役実・三一書房
太郎の屋根に雪降りつむ 別役実戯曲集	別役実・三一書房
やさしい犬	生田萬・而立書房
署名人/ぼくらは生まれ変わった木の葉のように/楽屋 清水邦夫 1	清水邦夫・早川書房
20世紀の戯曲Ⅱ 現代戯曲の展開	井上理恵・馬場辰巳他・社会評論社
20世紀の戯曲Ⅲ 現代戯曲の変貌	清水晶子・藤田富士男他・社会評論社
くじらの墓標	坂手洋二・而立書房
斬られの仙太：天狗外伝	三好十郎

段ボール箱で約150箱あり青少年センター別館倉庫に仮貯蔵していたが来年度(2008年)に別館が取り壊されることになり行く先を思案していたが青少年センター前の駐車場の真下に小さな建屋があり、その昔、公用車の運転手控室だった場所が現在最終処分（無害化処理）の順番待ちのPCB保管庫になっており、この保管庫に設置された木製の棚に行く先のない資料が仮住まいすることになった。今年8月の暑い日、県演連のみなさまの労力提供で150個のうち100箱を涙をのんで廃棄することを決定。重要な資料50個を10月29日に移転した。

県演連ではこれからも「第二資料室」開設の要望をつづける。PCB保管庫は開設までの仮住まい。資料は横浜演劇研究所が飽和状態になり青少年センター、磯子区中原、栃木県上三川町と流転を繰り返し保管庫にたどりついたもの。思えば遠い居候の旅だった。

因みにPCBは完全密閉、木箱梱包で資料が汚染する心配はない。



書名	著者名・出版社
精霊流し 岡部耕大戯曲集	岡部耕大・而立書房
シュールレアリスム宣言	加藤直・而立書房
ヤマト彦	鈴木美枝子・而立書房
さよならマックス 山元清多戯曲集	山元清多・而立書房
炎の人 — ゴッホ小伝	三好十郎・而立書房
比置野（ピノッキオ）・ジャンバラヤ	山元清多・白水社
千年の孤独 新宿梁山泊戯曲集	鄭義信
頭痛肩こり樋口一葉	井上ひさし・バウハウス
喜びの琴・附・美濃子	三島由紀夫・集英社
朱雀家の滅亡	三島由紀夫・新潮社
優秀新人戯曲集 2007	劇作家協会岩崎裕司・山之内宏一・ポロゾ新社
手塚治虫の生涯	松尾スズキ・演劇ぶっく社
屋根裏・みすず 坂手洋二 1	坂手洋二・早川書房
東京ノート 平田オリザ 1	平田オリザ・早川書房
道元の月	立松和平・祥伝社
ヤンボ・スギハラア：平石耕一現代史劇選集	平石耕一・アトフ
シンクロシティ・ララバイ	西田大輔・論創社
ワンマン・ショー	倉持裕・白水社
サド侯爵夫人/わが友ヒトラー	三島由紀夫・新潮社
五月の人ひと一尖閣群島：本田英郎戯曲集Ⅱ	本田英郎・炬ノミル社
劇作は愉し：名作戯曲に作劇を学ぶ	斎藤憐・ポロゾ新社
八木柙一郎戯曲集 1	八木柙一郎・白水社
八木柙一郎戯曲集 2	八木柙一郎・白水社
エロスの果て	松尾スズキ・白水社
仮面の聲：[横浜ポルトシアター]仮面劇集	遠藤琢郎・新宿書房
夢の泪	井上ひさし・新潮社
遭難	本谷有希子・講談社
この水や君の器に	今井良春・門土社
君は海を見たか（シナリオ 1982）	倉本聰・理論社
戯曲代表選集 昭和32年版(1957)	日本文芸家協会編・白水社
平澤計七作品集	平澤計七・輪創社
雨と夢のあとに/エトランゼ	成井豊+真紫あずき・輪創社
夢の裂け目	井上ひさし・小学館
如月小春精選戯曲集	如月小春・新宿書房
月の教室（CD付）	宮沢章夫・白水社